

昭和四十四年一月當時科學技術廳の首席事務官たりし余馬場官房長室に呼出されぬ。官房長事務的に要求せざりし豫算急遽政治的につくことと相成りし由を告げ、そのため必要な關連法案の準備に取掛かるべきを指示す。豫算關連法案のための次官會議には厳しき締切あり、時間的餘裕を勘案すればその指示はほぼ不可能事なりき。

當時宇宙開發に關しては東大と科學技術廳の間に競争あり。東大は研究目的の衛星打上げに關心あり、固體燃料に基づくロケットの獨自研究開發を進めつつあり。これに對し衛星の利用に關心を有する科學技術廳はより實用的なる液體燃料に關心を示し、研究調整局航空宇宙課の中に宇宙開發推進室を設け對抗す。

されど遲遲として進まぬ宇宙開發に業を煮したる自民黨内の科學技術議員連盟の小宮山議員以下大藏省と直接折衝して宇宙開發事業團の設立に要する豫算を獲得せしなり。

宇宙開發事業團そのものの設立準備は研究調整局の謝敷參事官總指揮者となり、余は法律案作成の責任者となる。官房及び研究調整局の事務官を動員して特別班を組織し、會議室の一を法案準備室に模様替へし、これを根據地として以後餘事を擲ちこの一事に専念す。法案は原子力開發關連法令にその先例あり、これを土臺と爲さば特に難きことにあらず。なすべきは二あり、一は法制局審議を無事了すること、二は次官會議を通すため必要な關係各省の根回しなり。さなきだに法制局審議は難物にして、法制局審議官による扱きは各省事務官の最も恐るるところなり。法案の逐條審議に併行して關係省の了解を取附くる要あり。關係各省當方の足元を見て様々なる要求を突きつくる様は正に外交場裡の如し。余はそれらの現場に東奔西走し、自ら處すことを得ざれば然るべく事務官を派して對應せしむ。折衝は連日深夜に及び、歸宅には常にタクシーを雇ふ。幸ひ謝敷參事官江古田の公務員宿舍我家の隣合せにして車を共にすること屢なりき。

數日にして關係者疲勞困憊その極に達す。豺狼の如き各省に對しては覺書の濫發を以て應ず。覺書は破らるるため存すと嘯きつつ。法案提出の期限は辛うじて守られ、事業團法遂に陽の目を見る。その日謝敷參事官執務室にて倒れ、救急車にて虎ノ門病院へ搬送せらる。科學技術廳は寄合所帯にして各省より出向せる管理職ほぼ役立たず、このプロジェクトに寄與せるは謝敷參事官ただ一人なり。彼は沖繩出身、運輸省よりの出向なり。後船舶局長となる。

宇宙開發事業團その後宇宙航空開發機構に衣替へし、その種子島センターは多數のロケット成功裡に打上ぐ。されどその誕生に心血を注ぎし我等に打上げ見學の機會與へらるること更になし。他の國々にては如何ならむや。